

『法華經』における〈eka〉の概念

前 谷 彰

§0 『法華經』の一乗思想については、様々な観点から再三にわたり論ぜられ、拙稿は蛇足の感ありと思われる。しかし、今回敢えて持論の一部を述べさせて頂く理由は次の如くである。「方便品」を主とする『法華經』前半部は周知の如く、一乗思想を中心に展開されているとされ、その一乗思想は常に二乗もしくは三乗との対比において理解されて来た。しかしながら、今一度蔵訳・漢訳を照合しながら細部にわたってその内容を検討してみたところ、二乗・三乗との対比において理解されるべき箇所と、そうではない箇所とが複雑に混入しているのを認めることができるのである。又この用例は主として「方便品」の偈頌において、梵本と漢訳（特に羅什訳）との相違箇所に特徴的に見出さるものであるが、以下限られた紙面故、簡略に論旨をすすめて行きたいと思う。

§1 『法華經』全体において、eka と yāna の語の連結を追って、その語義解釈を試ると、我々が通常用いているところの〈一乗〉という漢語だけでは表現し得ない意味が内包されている。悉くその用例を列挙する余裕を持たないが、その語義解釈を typical な型としての eka-yāna という複合語の解釈として分類すると次のようになる。

I 類 eka(one, only one) の yāna, II 類 eka(unification) の yāna¹⁾, III 類 eka(one, only one) へと到る yāna, IV 類 eka(unification) へと到る yāna²⁾

以上の 4 類であり、このような解釈の一端は先学によって若干の指摘あるところのものであるが、それをより明確に³⁾附加整理したまでである。尚この解釈は eka-yāna という複合語のみならず、梵本において、ekaṃ eva yānaṃ, ekaṃ yānaṃ, ekasya yānasya 等の形であらわれるものにも、それらに包含されている意味として適応し得るものである、ということ述べ、主眼とするところの「方便品」を中心とした内容へと入って行きたいと思う。

§II 『法華經』において「方便品」第二から「授学無学入記品」第九までの八品の主題とするところは一乗の教えを説き明かすことにあるのは周知の如くである。しかしながら、これらの各品において、偈頌と長行の間には多くの差違を認めることができる。従って本来ならば各品を通して、偈頌と長行の新旧の問題及

び、相互の増広・改変等について検討を要するわけである。しかし『法華経』の recensions は各々相互に混入しており、その基本型を想定することは不可能である、という視点に立つならば、上記の如き操作は極めて困難なものと言わざるを得ない。そこで、現段階でなし得る操作は、まず、偈頌と長行との内容を分け、蔵訳・漢訳との照合を通し、それぞれの recension の差違を整理しながら全体の内容を把握して行く、というものであろう。従って今回はこのような操作の第一段階として、「方便品」の偈頌の内容を中心に検討して行きたいと思う。

「方便品」偈頌において、まず次の21偈を紹介することにする。(以下梵本は Toda 本をそのまま引用させて頂く)

upāyakośālyā mam' etad agram yeñūha bhāṣām' iha dharma loke. (taḥiṃ) taḥiṃ
lagaa pramocayāmi trayāś ca yānāny upadarśayāmiti 21 (Toda. p. 21; KN. p.33.
3-4; w. p. 22, 20-23) ※ KN, W=trīṇi
gañ phyir ḥjig rten du ni chos mañ ba śad || de dañ chags pa rab dgrol shiñ ||
theg pa gsum dag ũe bar bstan pa ni || de dag ũa yi thabs mkhas mchog yin no ||
(D. 14a⁶⁻⁷, P. 16a⁶⁻⁷)

諸求三乘人 若有疑悔者 仏当為除断 令尽無有余 (Ch. A. 5a=Ch. C. 133b)

志懐狐疑 而有猶予 若有菩薩 求斯道意 今当闕除 (Ch. B. 67c)

この21偈は、先行する20偈における「苦悩から解放された声聞たちに対して仏が説法する」という内容をうけ、あれこれと執われている者を解放するために「3つの乗」を説く、という内容である。しかし、この偈の直後の長行の内容との関係は極めて複雑な意味を呈しており至論を持たないため、紹介のみに留めておくことにする。ただこの「方便品」の偈頌の特徴について述べるならば、tri と yāna の語の結合が認められるのは、この21偈と69偈⁴⁾の二偈である。しかし tri-yāna とあるのみで、その tri-yāna とはいったい何であるのか、という具体的記述は、この「方便品」の偈頌を見る限り⁵⁾では全く認められない。限られた紙面故、結論を急ぐことにするが、上記の如く tri と yāna の語の連結が認められ得ながらも何ら詳述されることなく、この記述からだけでは二乗・もしくは三乗との対比といった概念を見出すことは極めて困難である。しかしながら本品の偈頌には極めて重要な概念を有する次のような偈頌が存在する。

upāyakośālyā prakānti vividhāni yānāny upadarśayāti. ekaṃ ca yānaṃ paridīpayānti
buddhvā imām uttamaśāntabhūmim G·105 (Toda, p. 30; KN. p. 30. 13-14; WB.
p. 196. 11-14) shi baḥi sa mchog ḥdi ni sañs rgyas nas || thabs la mkhas pa rab
tu ston mdsad ciñ || theg pa rnam pa tha dad mñon par ḥchad || theg pa gcig po

yoṇs su ston mdsad do || (D. 22b⁶, P. 25b⁷⁻⁸)

知第一寂滅 以方便力故 雖示種種道 其實為仏乘 (Ch. A. 9b=Ch. C. 142b)

善権方便 以若干教 開化令入 皆共諮嗟 是一乘道 寂然之地 (Ch. B. 72a)

これは仏達が善巧方便として種々(vividha)のyānaを説くが⁶⁾、乗(yāna)は唯一つであると普く知らしめ、これ(唯一つの乗)は最上の寂靜なる境地(bhūmi)である、と説いているのである。この内容からする限りでは、これまでは「一切皆成仏」という訳語に代表されて来た解釈の如く、eka-yānaの語は成仏へと到らしめる動的・目的的な意味をもつ語であるという見解は妥当ではないように思われる。即ちこの偈に示されるが如きeka-yānaは§Iで分類した4類のうち、第I類に属し、悟り・成仏へと向かう、もしくは向かわしめる乗り物ではなく、uttarāśāntabhūmiの語に代表されるような仏地もしくは覚りそのものを意味する語であると理解し得るのである⁷⁾。従って、この偈頌が存在する限り、triの-yānaの語の結合を認め得るからと言って、それを直ちに二乗もしくは三乗説に結びつけるのは危険であると言わねばなるまい⁸⁾。但しこれはあくまでも「方便品」の偈頌を中心に検討した見解であって、長行との関連を考え合わせると、容易に結論づけることはできない。従って、長行との比較対照は先述の操作のうちの、第二段階の操作として後日に詳述することにした。

1) I, II類ともdviguに解す。但し狭義tatpurṣaのGen.的用法も含む。

2) 狭義tatpurṣaのうち、Acc.的用法に解す。

※ ここではekaの語をone, only oneと、unificationの二義に大別したが、Pāli聖典にあらわれるekaの語は『法華経』におけるが如きekaの語とはその義を異にする。参考までにあげておくと次のようである。

Ekāsanassa sikkhetha samaṇopāsanassa ca, ekattaṃ monam akkhātaṃ, eko ce (ve) abhiraṃissati, (Sutta-nīpāta, G. 718, PTS. p. 138) ここで中村元博士がeko ce (ve)を「独り居てこそ」と訳されておられるように(「ブッダのことば」中村元訳 p. 155参照)、このekaの語は本来cariyā, nisinna等と結合し(ex. Vinayaṇṭika, Vol. I, PTS. p. 350; Vol. II, p. 36……etc.), 当時の修行者の理想的なあり方を意味する語として「alone」の義が内包されていると考えるべきであろう。尚このekaの語について後代の註釈書などでは増意は認められるものの基本的な「alone」としての語義は改変されていない。ex. Eko bhagavā pabbajjāsāṅkhātena eko, adutiyyattena eko, tanhāya pahānaṭṭhena eko, ……ekāyanamaggam gato ti eko, anuttaram sammāsambodhiṃ abhisambuddho ti eko. (Mahāniddeśā, Aṭṭhakavagga, PTS. p. 454)

3) 勝呂信静博士はここにおけるI, II類の解釈について触れておられる。(『法華経の一乗思想 - 仏乗と菩薩乗との関係について』『インド思想と仏教』pp. 191-205参照)

- 4) upāyakośalya mamāited idṛśam yaṃ trīni yānāny upadarśayāmi ekaṃ idaṃ yāna nayaś ca ekamekā iyaṃ deśand nāyakānām (Toda. p.28; KN. p.48. 13-14; WB. p.192. 11-14)
- 5) 長行においても何ら詳述されない。
- 6) ここでは tri-yāna ではなく、vividha と yāna の語が結合している点は留意すべきである。
- 7) ここでは詳説し得ないが、eko-yāna の語が、覚りもしくは仏地と同義であることを裏づけるが如き羅什の訳を次に引用する。
vyapanetha kāmṅṣā vicikitsd saṃśayā ārocayāmi aha dharmarājā·samādapemi ahaṃ agrabodhau na śvāvako mahyam ihāsti kaścit G 139 (Toda. 32; KN. p. 58. 7-8, WB. p.200. 14-17)
汝等勿有疑 我為諸法王 普告諸大衆 但以一乘道 教化諸菩薩 無聲聞弟子 (Ch. A.10b=Ch. C. 143a) この対応において、藏訳では agrabodhi の訳語としてそのまま byañ chub dam pa (D.24a⁷-24b¹, P.27b⁵) と訳し、Ch. B『正法華』(73a) も agrabodhi の訳語と目される「尊仏道」の語を語めることができる。羅什が agrabodhi の語を eka-yāna の訳語と同様「一乘道」と訳す用例は「方便品」以外に「信解品」に一箇所見出され、[(Toda·p.61; KN.124. 122-123; W·p.54. 21-24) (D.46b³⁻⁴, P. 53b¹⁻²) (Ch A.19a=Ch· C. 151b; Ch. B.83a) 又、agrabodhi をただ仏とのみ訳したり、最上乘と訳す用例も語めることができるが、このことに関しては後日に記することにする。
- 8) 事実、偶頌を見る限りでは、śrāvakayāna の語も pratyekabuddhayāna の語も全く認められない。

Texts and Abbreviations

Toda—Saddharmapūṇḍāūkasūtra, Central Asian Manuscripts, Romanized Texts, ed. by Hirohumi Toda, 1981.

KN—Bibliotheca Buddhica X, Saddharmapūṇḍarīkasūtra, ed. by H. Kern & Bunyiu Nanjio, 1970.

W—Saddharmapūṇḍarīkasūtra, Manuscripts found in Gilgit, et. by Shoko Watanabe, 1975.

WB—Gilgit Manuscript Group B of W.

D—デルゲ版, 東北 No.113

P—北京版, No. 781

Ch. A—『妙法蓮華経』姚秦鳩摩羅什訳, 大正九卷

Ch. B—『正法華経』西晉竺法護訳, 大正九卷

Ch. C—『添品妙法蓮華経』闍那崛多共笈多訳, 大正九卷

<キーワード> 『法華経』, eka-yāna, 二乗・三乗対比, agrabodhi

(高野山大学大学院)